

第3回みやぎ観光振興会議栗原圏域会議 委員からの主な意見

(当日ご欠席された委員につきましては、後日聞き取りさせていただいた意見を記載しています。)

1. 『圏域の観光の現状・課題』に関するご意見、ご提案

○圏域の現状と課題で、「二次交通の不足等により、日帰りの通過型観光が中心となっている」という表現について、タクシー会社や観光バス業者も結構あると思うので、二次交通の数が少ないということはないのではないかと。

2. 『圏域の施策の方向性及び取組』に関するご意見、ご提案

(1) 地域資源の活用等による滞在型観光の推進と人材育成

【地域資源の活用による滞在型観光の推進】

○くりこま夜市などのような、ナイトタイムコンテンツを基に宿泊者数を増やすという考えも持っていく必要があると思う。

○今後酒蔵ツーリズムなど、蔵元との連携も期待できる。

○山を走ったり自転車で登る日など、一般客と重ならないように普段やってはいけないことができる特別な日を設けられるとよい。また、みちのくアドベンチャーラリーのようなイベントを栗原でもやってほしいと思う。

○バイクやサイクリングなどのイベントについて、舗装道路を走るのは皆飽きており、田んぼのあぜ道などを走るのも面白いと思う。

○マガンのねぐら入りや、飛び立ちや栗駒のアニマルウェルフェアの養豚場の見学など、栗原全体で体験型のツアーを考えられると思う。

○栗原と一関・平泉を「鬼」を切り口として巡るツアーを企画している。また、「蝦夷」をテーマとした観光ルート造成も考えられる。「蝦夷」は絡め方次第で周遊ルートができると思う。白河の一関から津軽の十三湊までを、平泉を経由して一本の線で結ぶ奥大道ルートなど。教育旅行などで、アナザージャパン（教科書には載っていない蝦夷側から見た歴史文化）の部分を知ってもらいながら巡れるとよい。

【人材育成】

○県外で活躍している栗原出身で地元で貢献したいと思っている人たちと連携することもよいと思う。ただし、その場合は、受入側がしっかり対応する必要がある。

○ある場所のガイドが別の場所のガイドを紹介するなど、ガイド同士のつながりで客を呼んでくるケースが多く見られる。

○ガイドに関しては、一定数、市外の人にもなってほしい。市外からの目線も大切。

○養殖イワナや若柳地織など、栗原には他にない価値のあるものがある。見せ方や説明の仕方が大事で、お金をかけなくてもできる場所からやっていく必要がある。

○栗原市内でも自分が居住する地区以外のことは分からない人も多いと思う。観光資源は限られているのでその範囲の中で頑張るしかなく、そのためには、ほかの地区の情報も皆が共有し、分かるようにしないと行けない。

○滞在型観光を推進するためには、観光事業者の意識の底上げが必要。例えば、タクシーのシートバ

ックポケットに観光のパンフレットを置く、又は、栗駒山を訪れる人を案内する場合には、トイレ休憩と称して山の駅やビジターセンターを案内し、観光者に栗原市内の様々な観光施設等を知ってもらうなどの取り組みが進むとよい。

○栗原は広く、観光事業者でも結構知らないことがあるため、自分で見て、感じて、訪れた客に伝えられるよう、観光事業者が主要施設を巡るツアーがあるとよい。自分たちで再発見ができ、お互いに工夫することができると思う。

(2) インバウンド等の受入環境整備と効果的な情報発信

○インバウンドの受入に関しては、食について言えば、対応できる飲食店が限られていると、そこだけ忙しくなってしまうので、より多くの飲食店とも連携するなどできるようになるとよい。

○業務スーパーなどで簡単にハラール対応の調味料が入手できるようになった。そういう点で、ヴィーガンやハラールについてはだいぶハードルが下がったと感じる。ただし、飲食店がうまくできても宿泊施設が対応できないと多くの人の受け入れは難しい。

○二戸市のフードダイバーシティの先進的な取組の背景には、盛岡市に先んじて行わないと盛岡への客の流れが止められないという思いがある。すでに仙台には様々なジャンルでたくさんの店があり、栗原も二戸市と同様、先に取り組まないと仙台に取り込まれた後では遅い。

○インバウンドの言語への対応としては、ALTに協力してもらい、観光事業者の方に英語を使ってもらう場面をつくり、慣れてもらうというのもよいかもしれない。

○県観光連盟主催のFAMトリップ（米、豪の3社が参加）で、六日町のまち歩きを行った。風の沢ミュージアムから栗駒山麓ジオパークビジターセンターまでボンネットバスを運行し、風の沢ではライトアップをして八ツ鹿踊りを披露した。六日町商店街ではたい焼きの体験や山車の見学、お茶のお点前に紅葉をイメージした和菓子を出すなどしてもてなした。まち歩きはインバウンドに向けて有効だと手ごたえを感じた。たい焼きもコンテンツとなる。

○旅行者は、交通手段とどこに泊まれるかを一番気にするので、交通と宿の最低限の情報があるとよい。

○くりこま高原駅から先の交通手段を検討していただきたい。

(3) 観光客のさらなる誘客に向けた広域的な取組強化

○DMOについては、県の観光連盟と合わせて平泉も含めて捉えてほしい。自治体だけでなく、民間のDMOが入った形の連絡の場があるとよい。

3. 圏域別数値目標の設定方針に関するご意見、ご提案

○計画としては、11万人泊の目標値も圏域の施策の方向性も妥当だとは思っている。一方、宿泊者数をKPIとすることは、アドベンチャーツーリズムや農泊の推進などを掲げている栗原の戦略には合っていないとも感じている。新たに宿泊施設ができるくらいでないと11万人泊の目標は達成できない。1万人増は相当な数。

○目標値の根拠になる数字として、ベッド総数と稼働率のデータが重要となるのではないかと感じる。キャパに対して現状がどうなっているのか把握することで、機会の損失といった宿泊者数が伸びない原因を分析できると思う。宿泊を主眼とした施策を組むにあたって重要。

○設定した数値目標はコロナを意識したパーセントになっているが、現在影響があるのは物価高騰ではないか。物価高騰を含めると105%の伸び率で大丈夫だろうか。物価高騰の考えを加味しなくてもよいのか。

○栗原市の観光客の入込数に対しての宿泊者数は例年5%か6%くらいである。そのパーセンテージを6%、7%などと段階的に上げていくような、パーセンテージを用いる考え方もあってもよいのではないか。